

† 「今こそ、心からわたしに立ち返りなさい（ヨエル書2章12節）」。

ここ数日の温かい気候のせいでしょう。園庭の桜（早咲きの種類？）が咲いているのを見ると、元気になるといふかホッとするような感覚を覚えます。年はじめの大寒波のことを思い出すと尚のことですが、寒さという試練を乗り越えてきた命の躍動を感じられ、どこか勇気すら沸いてきます。その他にも幾つかのプランターの中にも大寒波を乗り越えてきた花々があると聞き、ただただ驚嘆するばかりです。

さて、教会は2月17日（水）に四旬節を迎えましたが、前回のコラムでもお伝えしたように、四旬節はじめの水曜日は「灰の水曜日」と呼ばれ、普段ならばミサの中で額や頭に灰を被る（少量を振りかける）儀式を行います。神父が「あなたは塵であり、塵に返っていくのです」または「回心して福音を信じなさい」と呼びかけながら信者の額や頭に灰を振りかけていくのですが、この儀式は“神の前における遜り（へりくだり）や謙虚さ”を示すもので、私たちの命が神のものであることを意識するために行います。創世記の2章7節には神が土の塵で人を形づくってその鼻に命の息を吹き入れられたこと、また、誘惑に負けて神から離れた後には塵に過ぎないあなた（人）は塵に返ることも告げられていることから（創世記3章19節）、灰を用いて、いずれ死んで土に返る事実を謙虚に受けとめます。いわば“神の前にあって死去すること”を受け入れ、さらに“再び息を吹き入れられるように謙虚に生きること”を決心するのです。ちなみに、聖書では神が創造された「人」のことを「アダム」といいますが、これは「土＝アダマン」に由来しています。

教皇フランシスコは灰の水曜日、謙虚に神のもとに立ち返ろうとする全ての人に向けて次のように話しました。

「（四旬節は）自分の心の向かう先を識別する時であり、自分の人生は神に向かっているのか、『わたし』に向かっているのか、主のみ旨（神の思い）にかなうことを喜びとするのか、人々の間で目立ち、称賛され、人気を得るために生きるのかを自問すべきである。神のもとに帰ることは、自分の力ではできず、神の恵みを受け入れること、自分は神の憐みを必要とする者であると認めることにより可能になる。「灰の水曜日」に頭に受ける灰は、わたしたちは塵であり塵に帰ることを思い出させるが、この塵の上に神はいのちの霊を吹かれた。謙遜の道こそが、神のもとに帰る正しい道である。」

第五回目のテーマは「良く生きて良い死を迎える」です。

灰の水曜日の前日（2月16日）、3月13日に卒園する年長さんたち、また、3月2日には来年度に年長さんになる子どもたちに話をしました。用いたのは「土」、「灰」、「ソテツの枝」、「十字架像」。毎年、教会はイエス様がエルサレムに入城する際に枝を手にもって迎えた人々のように、枝を手にし、イエス様を盛大に迎える行列をもってミサを始めます（今年は3月28日）。「枝の主日」（※）といいますが、伝統的にその際に用いたソテツの枝を燃やして灰の水曜日のために灰にします。今年は緊急事態宣言が発令されていたので

使うことなく保管していました。(※)「枝の主日」は人々に盛大に迎えられたイエス様がその人々によって逮捕され、ムチ打たれ、十字架につけられるという受難の出来事も思い起こすために「受難の主日」とも言われます。ミサの中で読まれる福音箇所はイエス様が茨の冠を被せられて裁判の場に立たされ、ムチ打たれ、十字架を背負って歩かされ、釘付けにされる場面です。

子どもたちには「どんなものでも神さまがつくられたものは何でも死んで土に返る。この灰になったソテツの枝も土に返るし、虫や他の植物も死んだら土に返る。でも終わりじゃない。そこからまた命がつながる。神さまは良く生きたら良く死ぬことができ、そこからまた命が生まれることを教えてくれているんだよ。だから、一生懸命に良く生きましよう。これからどんなお兄さん、お姉さんになるか、もっと大きくなってどんな仕事をして、どんな毎日を送るか分からないけれど、大切なことは、いただいた命を大切に一生懸命に生きること。まわりの人の命も大切に、一生懸命に生きている人を応援し、今度は自分も助けてもらいましょう。イエス様も一生懸命に生きたんだよ。十字架はそのしるし。だから、十字架のイエス様を見て、いつも一生懸命に生きている人のことを思い出して応援してあげてください。お祈りもそのためにするんだ。金曜日のお帰りの時にするお祈りは、病院で働くお医者さんや、看護師さんのためにするでしょう。まだ死んではいけない人が治ってまた生きられるようにお仕事して下さっている人たちだから、お祈りをして応援しているんだ。だから、これからも応援してね。そして、みんなの幼稚園でのお仕事もがんばってください」と伝えました。

良く生きるとは良い死を迎えることにつながります。私たちにとって良く生きるとは、与えられた命を大切に、神さまに対し、周りの人に対し、自然に対し、そして自分に対しても謙虚に生きることになります。このような姿勢を深めることによって、今を生きていることや毎日の糧をいただけることを素直に感謝することにつながり、今日を生きられないほどに苦しむ人、不慮の事故や災害で命を落とした人や遺族にも心に向け、その人たちのために行動する勇気を持つことにもつながっていくはずで。そして、謙虚に生きようとしている自分のことを好きになり、また誇りにすることができたら、本当の優しさや思いやり、自己犠牲、共生、共存など、現代の社会に最も欠けているテーマをすべての人が意識し、共有することができるようにもなると信じています。すべての人が良く生きて良い死を迎えることができる世の中になるために、謙虚さを大切にする私たちでありますように。